明治・大正・昭和・平成――交悠録

東京進出を契機に「ロマン会」発足
～絶え間なき『公論』からの提言～

本誌主幹　大中吉一

かくして「リレー対談」は始まった

本誌は、そもそも大阪で「財界公論」という名称で生まれました。他誌では真似のできない企画であった細川隆元氏の対談シリーズには、キッコーマンの茂木啓三郎氏、国策研究会の矢次一夫氏、東急電鉄の五島昇氏など、隆元氏ならではの名士たちが続々と登場してくださいました。この対談シリーズが15年ほど続いたころ、細川氏が出演していた『時事放談』もそろそろ終焉という噂が流れ、細川氏からの対談シリーズも潮時ではないかという言葉を受け、当時相談役であった瀬島龍三氏に続編をお願いできないか相談いたしました。

当時「第2次臨時行政調査会（臨調）」の委員であり、さらに「伊藤忠商事」の重鎮となっておられた瀬島氏は、隆元氏が15年以上続けてくださったことを聞くと、「そんなに長くは無理だが3回だけ受けてやる」とおっしゃってくださいました。

そうしてスタートした『憂国対談』1回目の対談相手は、当時NHK解説委員長であった山室英男氏でした。ご両人は、本誌の大きなテーマである、「いまこそ問うこの国のかたち、この国のゆくえ、これでいいのか日本」を語り合い、翌月にはめったにこうした対談には出ない元読売巨人軍監督の長嶋茂雄氏が、さらに3回目には土光臨調の参与であった「ウシオ電機株式会社」会長の牛尾治朗氏が登場してくださいました。

まさに3回とも瀬島氏ならではの人脈と人選で、そのお話は実に奥深く、重みのあるものでした。

3回目の対談の折、瀬島氏は牛尾氏に本誌のことを話してくださり、それまで大阪に軸足を置いてきた「財界公論」は、東京におけるネットワークが足りないので、この対談を「リレー対談」として、ゲストが次にホストとなり、新たなゲストを招聘することを提案してくださいました。

この1983年の瀬島氏のお考えが、今日まで続く『リレー対談』の原点となったのです。

爾来、政界・財界に留まらず、芸能界やスポーツ界、芸術の世界など、その広がりは無限大で、今更ながら瀬島氏の先見の明に感嘆する次第です。

例えば、團伊玖磨氏と李香蘭氏の対談では、團伊玖磨氏がずっと李香蘭氏に憧れていたことなど、これまで語られなかった様々な秘話が『リレー対談』で披瀝されてきたことは本誌の誇りでもあります。

「月刊公論」と東京進出

そんな折に思い立ったのが、誌名の改定です。明治維新の折に明治天皇が、今後の日本のあるべき姿を宣誓する形で示した「五箇条の御誓文」の冒頭に示された「廣ク會議ヲ興シ、萬機公論ニ決スヘシ」を引用し、「月刊公論」にしたい旨を瀬島龍三氏にお話しすると、「それは素晴らしい」と大賛成してくださり、しっかり会議を起こし、世に「提言」を出し続けるよう示唆をいただきました。

こうして「月刊公論」としての出発をすることとなったのですが、その際に、細川隆元氏を発起人として、「伊藤忠商事」会長の瀬島龍三氏、モスクワ・オリンピックの放送権を獲得して時の人となった「テレビ朝日」の三浦甲子二氏、「経団連」副会長の花村仁八郎氏、「三井不動産」社長の坪井東氏、「住友不動産」会長の安藤太郎氏、さらに「丸善石

油」と「大協石油」の合併を成功させ「コスモ石油」を誕生させた中山善郎氏など錚々たるメンバーが中心となって、ホテルニューオータニ「鳳凰の間」に1200名以上の方をお招きして盛大に「月刊公論」のスタートを切ることができました。

これを契機に、日本の未来のために本誌が貢献していくためにも、本社を東京に移転するべきではないかということとなり、いよいよ東京に編集部を置いた「月刊公論」としての新しい門出を切ることとなったのです。

こうした経緯を持つ『リレー対談』。今日まで、まさに百花繚乱、色とりどりの方たちが登場され、本誌ならではの視点と世界観で、興味深い対談世界が繰り広げられております。ぜひご一読いただければと思います。

新橋花柳界の祭典「東をどり」

「小すが」での勉強会と「東をどり」

東京進出をきっかけにスタートしたのが、このページのテーマでもある「明治・大正・昭和」のロマンを未来にという趣旨で生まれた勉強会が「ロマン会」です。発足の際に「システムスインターナショナル」代表取締役会長の荒井好民氏に相談した際、荒井氏は諸手を挙げて賛同してくださり、各方面にお話をしてくださったお陰で、実に100名近いメンバーが集まってくださり、いよいよ東京での勉強会がスタートすることになりました。

まず会場をどこにするか、ですが、そこで由緒正しき老舗ということで、新橋の料亭「小すが」を選びました。

この「小すが」は新橋花柳界とも深い繋がりがあり、そもそもは新橋芸者「小須賀」こと丹羽ミチさんが開いた「和光」という料亭がはじまりで、そこを贔屓にしていたのが、海軍元帥であった山本五十六氏でした。その「和光」が丹羽ミチさんの芸者時代の源氏名ゆかりの「小すが」となってからも、足繁く通ったそうで、「小すが」には「和光」時代に山本五十六氏が描いたという看板が、置かれていました。山本五十六氏は開戦当時の浮かれた風潮の中、「和光」の丹羽ミチさんに宛てて、「今に東京に爆弾の雨が降るともうおしまいでしょう。そうなるとさすがの和光も落ち着いて商売も出来なくなりますから…」という便りをしたためたそうです。

2024年5月に99回目を迎える「東をどり」は新橋演舞場を舞台に開催される新橋花柳界の祭典ですが、この新橋花柳界において、「和光」時代からの丹羽ミチさん、そしてそのお嬢さんの丹羽政子さん、そしてお孫さんである丹羽順子さんの3代の女将はまさに歴史そのものと言っても過言ではない存在です。

「ロマン会」はその「小すが」で月に1回〝寺子屋〟と名付けた勉強会を実施しました。第1回に招聘したのが「本田技研」の創業者である本田宗一郎氏、続いて「松下電器（現パナソニック）」の松下幸之助氏、「ソニー」の盛田昭夫氏など、後の日本の経済成長を支えた立役者の皆さんが講師として登壇し、多くの示唆に富んだ話をしてくださいました。

大正14年に始まり、来年は100回を数えるという「東をどり」は一見の客には見ることのできない花柳界の世界を垣間見せてくれるチャンスです。

春5月、「東をどり」の案内が届くと、必ず「小すが」での勉強会を思い出します。

第九十九回 東をどり